

8603 アメリカの会社員にもいろいろとうるさいタブーがあるが、ごく常識になっているところ

で、たとえば、上役の出身校が自分のより良くない場合は、その人の前で学校の話をしてはいけないというのがある。また、もし上役の洋服が自分のよりも品質が落ちる場合には、洋服の話を持ち出してはいけない。こういうことは、出世昇進の妨げになるばかりか、悪くするとクビの危険性もある。

坂板 元『アメリカを読む』

[許容訳例]

In America, too, there are a variety of troublesome taboos among office workers, and one of the most widely accepted says that when the school from which one's superior graduated is worse than one's own, one must not talk about schools in front of him. And if the suit that a superior is wearing is of worse quality than one's own, one must not bring up the subject of clothes. These things not only hinder one's promotion but, should worse come to worst, may lose one's job.

[翻訳例]

Among American office workers, too, there are all kinds of strict taboos; one of the most widely accepted says, for example, that where a superior has graduated from less distinguished school than oneself, one must not talk about schools in front of him. Again, should the suit a superior is wearing be inferior in quality to one's own, one must not bring up the subject of clothes. Such things not only hinder one's chances of promotion but in the worst eventuality may even endanger one's job.

■アメリカの会社員にもいろいろとうるさいタブーがあるが、ごく常識になっているところで、たとえば、上役の出身校が自分のより良くない場合は、その人の前で学校の話をしてはいけないというのがある。(8603)

★「アメリカの会社員にも・・・」は「アメリカにおいても会社員に・・・」と解した場合でも、不特定の‘アメリカの会社員’が話題になっているのですから office workers と無冠詞複数にしなければなりません。Among American office workers, too, ...; In America, too, ... among office workers などとなります。

★「いろいろと～」は「いろんな種類の～」という感じですから a variety of; many; a lot of; all kinds of などが使えます。なお、all kinds of は「あらゆる～」というような強い意味ではなく、単に「いろいろな～」という意味です。

★「うるさい」は、ここでは「騒々しい」という意味ではありませんが、「厄介な」(troublesome; bothersome)という意味でもあり、「(守らないと[気をくばらないと]人が問題にする[問題に

なる]という意味で)うるさい」(strict)というニュアンスも含んでいると思われます。これにぴったりあてはまる英語はありません。したがって、ここは解釈する人によって、どちらを使ってもいいということにせざるをえません。

★「タブー」は複数で taboos です。

◆there is a variety of…か there are a variety of…か

「いろいろとうるさいタブーがある」の「いろいろ」に a variety of を使うと、there is a variety of ~s とすべきか there are a variety of ~s とすべきか迷いますが、a variety of は many と同じような形容詞のように考える人が多いので there are…とするのが普通です。there is a variety of とするのは pedantic な人だけでしょう。

● [が] (話題導入の [が])

「タブーがある [が], …」の [が] は、「逆接」の関係をあらわすものではなく「話題導入」です。しかたがって and を用いるか、あるいは、セミコロン(;)を使ってつなぐかです。

★「ごく常識になっている」の「常識」は「(何も特別なものではなく)みんなが受け入れていること」という意味です。こういう場合には、It is widely [generally] accepted that…を使うのが普通です。日本語の「常識」には二つの意味があって、一つは「ある事態にみんなすべきと決まっている規範(common rules)」(たとえば、お葬式には黒い服を着るものだ、とか)、もう一つは「みんなが知っている・受け入れていること(widely accepted knowledge)」とがあって、そのつど、文脈を考えて訳さなければなりません。なお、common sense は「すべての人に共通する合理的現実感覚」です。たとえば、第二次世界大戦のとき、ドイツがロンドンを空襲しました。人々は一斉に地下鉄の駅の構内に逃げこもうとしました。駅の改札は切符を持っていないからストップをかけます。すると、人々は入場券を買って改札を通りました。「ある事態に対して(強いられることなく)みんなが同じよう現実を感知して合理的に対応する感覚」を common sense と言います。日本の「常識」と一部合いますが、ずれの方が多いようです。

●「隠れ連体修飾節+体言」(ごく常識になっているところ)

「ごく常識になっているところで」の「ところで」は「(たとえば)ごく常識になっているもの(一つ)は」という意味です。とすると、これは「連体修飾節(ごく常識になっている)+体言(もの)」です。英語では「名詞(one of the examples)+関係詞節(that are accepted most widely)」ですが、これを定冠詞を使って名詞化(the+形容詞)して one of the most widely accepted とすると、これを主語にして says, for example, that…と続けることが出来ます。

★「たとえば」は for example です。~ says, for example, that…と挟めばいいでしょう。

★「上役」は superior ですが、ここでは「不特定の一人の上役」ですから a superior とします。なお、one's superior というと上役は一人しかいないようにもとれるので避けるべきです。

★「出身校が自分のより良くない」の「良くない学校」とはどういう学校でしょうか。英語では、「学校が良い[悪い]」と言う場合には、習慣的に good; better; worse ではなく、たとえば、distinguish の形容詞を使います。つまり、a good school というと、普通、「教え方や教授内容がよい学校」ということです。ここで言う「良い」とか「良くない」は学校の内容そのもの(もらろん、内容とも関連があるのですが)よりも「世間の評判がよい」とか「世間の評判が良くない」ということですから、less distinguished を使うといいと思います。

● [・・・の場合(に)は] (where; if; when)

「・・・の場合(に)は」は前後の文脈で where; if; when など で表します。ですから「(ある一人の)上役が出身校が自分のより良くない場合(に)は」は where [if; when] a superior has graduated [graduated] from less distinguished school than oneself であり、「(ある一人の)上役が卒業した学校が自分の学校よりも著名でない[場合(に)は]」と考えると、これは「連体修飾節((ある一人の)上役が卒業した) + 体言(学校)」ですから、英語では「名詞(the school) + 関係詞節(from which a superior has graduated [graduated])」となって、where [if] the school from which a superior has graduated [graduated] is less distinguished than one's own, となります。なお、oneself とか one's は yourself とか your に変えても構いませんが、ourselves とか our に変えるのは、たとえ一般人称のつもりでも「実際の自分たち」の感じと誤解されやすいので好ましくありません。

★「その人の前で」は in front of him でしょう。to his face は behind his back (陰で) に対する表現で「面と向かって」ということですから、ここでは無理でしょう。before him は、間違いではありませんが、少々古くて堅い感じです。たとえば、昔の偉い人に関する記述の中で Today his statue stands before the station. とすれば、ちょっと気取ったというか、文学的なニュアンスが出るといった具合です。

★「学校の話をしてはいけない」の「学校」は、「自分の学校」でも「上役の学校」でもない、一般的な意味における「学校」ですから、無冠詞複数の schools を用いて one must not talk about schools です。

■また、もし上役の洋服が自分のよりも品質が落ちる場合には、洋服の話を持ち出してはいけません。(8603)

● [また] (同時)

[また] は and でもよいのですが、again も使うことができます。「もう一つ例をあげると」という場合によく使われます。また「同じような例をもう一つ挙げれば」という場合なら similarly でもよいでしょう。

★「上役の洋服」の「上役」は、上と同じで「不特定の上役」(a superior)としてもいいし、「いま話題にしているようなシチュエーションの中での上役」として the superior とすることも出来ます。

● 「隠れ連体修飾節 + 体言」(上役の服)

「上役の服」は「上役の着ている服」という意味ですから「連体修飾節(上役の着ている)

+体言(服)」で、英語では「名詞(the suit)+関係詞節((which; that) a [the] superior is wearing)」です。なお、「(上役の) 洋服」は「スーツ」(suit)でしょう。

★「品質が落ちる」は「服が品質の点で劣っている」とするなら inferior in quality であり、「悪い品質の(服)」なら of worse quality (than…)です。

● [(もし(万一)・・・) 場合には] (Should ~ be…)

「もし・・・場合には」は‘if+現在時制’でもいいですが、「もし・・・場合には」には、If…should の if を外して Should~ be…で表すことも出来ます。つまり、この場合、「上役の服が品質の点で劣っている場合には」は if the suit (which) a [the] superior is wearing [should be wearing] inferior in quality to one’s own, …とか、あるいは、「上役の服の品質が悪い場合には」なら if the suit (that) a [the] superior is wearing is [should be wearing] of worse quality than one’s own ですが、if を省いて should (万一・・・) を統治させて should the suit (which) a [the] superior is wearing] be inferior in quality to one’s own, …とか should the suit (that) a [the] superior is wearing be of worse quality than one’s own. とすることが出来るということです。

★「洋服(の話)」の「洋服」は、前述の「学校」と同様に、特定の洋服ではなく、「(一般的な意味における)洋服(のこと)」ですから、suit ですが、[着るものの話(=話題)]というニュアンスが感じられるので、無冠詞複数にして the subject of clothes とした方がいいでしょう。

★「(洋服の話)を持ち出してはいけない」は one must not bring up (the subject of clothes) とします。must not の代わりに should not は弱いです。これは「理想的には・・・しない方がいい」というニュアンスが入ります。また、辞書には「(話・話題を)持ち出す」に drag も出ていますが、これは「無理に引き出す」の感じです。また broach は「話を切り出す」の感じです。bring up が普通です。

■こういうことは、出世昇進の妨げになるばかりか、悪くするとクビの危険性もある。(8603)

★「こういうことは」は「いま述べた二つの例のようなこと」ではなく、「いま例にあげた二つのことだけではなく他にもいろいろ」という感じですから these things より such things の方がいいでしょう。

★「出世昇進」は「出世と昇進」ではありません。日本語では意味を強めるために同義語・類語を重ねることがよくあります。ここもそれで、ここでは会社内の話のようですから「昇進」を中心にとらえて one’s chances of promotion とします。one’s promotion より one’s chances of promotion の方が英語らしくなります。

★「妨げになる」は hinder(邪魔をする)がいいでしょう。これに近い語に prevent がありますが、これは「完全にさえぎってしまう」で、どちらかというと、望ましくないものを対象に使う場合が多いので、ここでは使わない方がいいです。他に work against~なら使えます。この場合の work は have an effort [influence]という意味になります。

● 「・・・ばかりでなく・・・」 (not only ... but ...)

「・・・ばかりでなく・・・」は not only... but...です.

★「悪くすると」は、日本語の決まり文句の一つ. こういう決まり文句はどの言語にもあるもので、当然、英語にもあります. 英語では if the worst comes to the worst です. アメリカ英語なら if worse comes to worst でしょう. これを使うなら if を省いて倒置して should worse come to worst とする方が話語的です. if luck turns against one は「運のめぐりが悪いと」→「運がむかないと」で、ここでは使えないでしょう. 他には if the worst happens なら使えます. これと同じで会話で使う表現に in the worst eventuality という表現もあります. eventuality というのは、たとえば、in any eventuality とすると、whatever happens という意味になりますから in the worst eventuality で if the worst happens と同じことになります.

★「クビの危険性もある」は「クビになるかもしれない」とか「職を失うかもしれない」と考えます. (Such things) may even endanger one's job あるいは may lose one's job として主語を統一出来るし、また、one may lose one's job としてもいいでしょう. lose の代わりに cost も使えます.